

◆◆◆ 気象庁 今夏の異常気象（西日本の高温・少雨）の分析結果を発表

気象庁では、平成19年6月に「異常気象分析検討会」を設置し、社会経済に大きな影響を与える異常気象（比較的長期（2週間程度）にわたって持続したもの）が発生した場合に、この検討会において、異常気象に関する最新の科学的知見に基づく分析検討を行い、その発生要因等に関する見解を迅速に発表することとしています。同検討会は大学・研究機関等の大気大循環・地球温暖化等の専門家により構成されており、現在会長の木本昌秀東京大学気候研究センター教授をはじめとする10名の大学関係者等が委員を務めています。

気象庁では、今夏の7月以降の西日本を中心とした高温・少雨の状況やその要因等の分析・検討のために、「異常気象分析検討会」を8月8日（金）に委員の間のインターネット会議の形式で開催しました。以下は、同検討会の結論をもとに気象庁が発表した7月の西日本の高温・少雨についての見解です。

【実況】

2008年7月の天候の特徴として、西日本を中心に高気圧に覆われ晴れて高温の日が多かった。西日本の平均気温は平年に比べて+1.6℃と1946年以降第3位の高い記録となったほか、西日本太平洋側の降水量は29%と同年以降で最も少ない記録を更新するなど、顕著な高温・少雨・多照となった。その一方で、局地的な大雨も記録される日もあった。このような状態は8月になっても継続している。

【要因】

- ①西日本上空の気温は地表に近いほど高温が顕著であり、高気圧に覆われて強い日射により地面が暖められた効果が寄与していたと考えられる。
- ②日本上空の偏西風は7月前半に平年よりかなり弱く、梅雨前線の活動は不活発だった。西日本は、高気圧に覆われる日が続いた。
- ③このような大気の流れには、北西太平洋を中心とした北緯20度帯およびインド洋西部赤道域で活発だった対流活動が影響した可能性が大きい。また、これらの対流活動には、太平洋西部やインド洋の海面水温分布が影響しているものと考えられる。

【見通し】

西日本では、今後2週間も、一時的に曇りや雨の日もあるが、高気圧に覆われて晴れる日が多く、平年に比べて気温の高い日が続く見込み。

（8月8日発表の気象庁のホームページより）